

旅するわたしのぬいぐるみ

三年 山口芽生

「こんなことあったよね。」

「こんな思い出もあるあったよね。」

わたしは、お母さんは、そんな会話をしながらぬいぐるみ
を一つ一ついいおいにまわります。

それは、お母さんが教えてくれたものでした。こまっ
る子たちや、外国の子たちにわたしのお気に入りぬいぐる
みをゆずるといふものです。いつもいっしょのぬいぐるみ。
たくさん思い出がつまんだぬいぐるみ。どれも手はなした
くないわたしのぬいぐるみ。はじめは、たくさん考えました。
お母さんに、
「いやだ。」

とも、言いました。だけれど、「自分より年下の子や、同じ
くういの子たちが大切に使うってくれるかもしれない。わたし
が、こまっっている子を助けてあげられるかもしれない。それ
だと、わたしもうれしいし、安心してお別れができるかもし
れない。そう思ったのです。

せんたくがすむと、ダンボールに一つ一ついいおいにつめ
ていきました。

「ついにゆずるときがきたんだ。」
やっぱソレさみしい気持ちになりました。でもそのとき、ぬい
ぐるみみんながわたしの顔を見てにっこり笑ってくれた。ふ
な気がします。

「この国にどくかな。だれかがよろこんで大事に使っ
てくれますように。」

